

やさしい旅ヘルプ

(12)

リハビリ目的でトラベルアザラシ型の認知症対応口ヘルパーのお出掛けを乗ポットなども提供している。住まいから暮らしへ視点が進化している。

東北大学が開発した。新幹線で二緒になり、仙台駅で自らペダルを操作して下車した。少し誇らしげな顔が忘れられない。

ドイツではExmove reという会社が未来感覚の移動支援機器を開発している。腰からすっぽり、まるでセグウェイ(立ち乗りの電動2輪車)といった感じだ。日本も大和ハウスが歩行をアシストする福祉用ロボットスーツの開発に取組む。医療と連携し、

全ての人が旅できるために

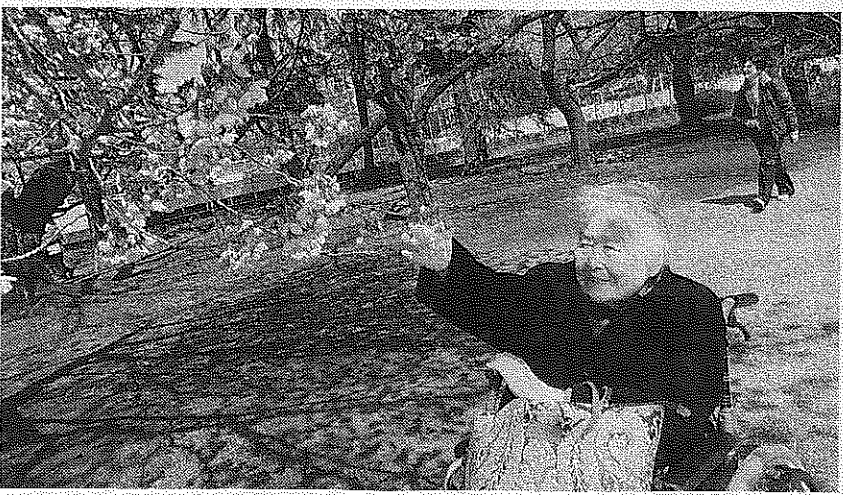
気付き、支える力を

宿の定宿で「こんな不便ならやってみるとさまざまなる所に来てもらって」と言われたことがある。しかし、体にも不自由がある人が不便でも行きたい所に行けるにはどうしたらいいかを考えるのがトラベルヘルパーの

仕事だ。先日、2人一組で、1人が目隠し、1人が食事介助する訓練をした。目隠しをした人は、普段より食べ物素材や形状を敏感に感じ、味わいが増したと感想を漏らした。何気なく行動していることを意識しながら、一度体験すれば視点も変わってくる。歩道のわずかな段差やトイレの場所が気になる。ホームの傾斜や駐車場の優先マークが自然と目に付く。このように感じる力を養うことが人材育成の肝だ。そうした人が地域に増え、旅先に目を向ける

と、そこに多くの社会資源があることに気付くはずだ。「全ての人には旅をする権利がある」。トラベルヘルパー育成を始めた1995年に観光政策審議会から出された答申の見出しだ。「人は旅により日常から離れ、未知の自然、人、文化、環境と出会い、新た

な自分を発見する。人は旅創造力を養つ」と続く。高齢化が進む中で、「移動したい」という多様なニーズに応えるのは、日本が得意とする物づくりの技とおもてなしの心、そして地域力だ。



(日本トラベルヘルパー協会理事長・篠塚恭一)(おわり) 思わず格に手が伸びて